# Hack For Japan + Code for Japan

# あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

## 第91回

## Hack For Japan 8年間の活動を振り返る(1)

●Hack For Japanスタッフ
鎌田篤慎(かまた しげのり) Twitter @4niruddha

今年で2011年3月11日から丸8年が過ぎました。我々Hack For Japanはあの震災に対し、「自分たちの開発スキルを役立てたい」という開発者の想いを形にするために、そうした開発者を中心としたコミュニティとして生まれました(**図1**)。本連載でも復興支援にかけるさまざまな活動を紹介してきましたが、月日が経つことで復興支援への関心の低下を目の当たりにすることもあれば、活動の内容自体も復興支援から防災・減災にも視野を広げるような変化もありました。さらにはこうした活動から発展し、エンジニアの力を社会貢献に活かすCode for Japanのような取り組みも数多く見られるようになり、本連載を続けることにもつながっていることも、これまでと比較して大きな変化だと言えます。このように、これまでの8年の間に良い意味での変化を感じることが多くなってきました。

毎年3月11日にHack For Japanのメンバーが集まり、東日本大震災から今日までを振り返る会を実施しています。そこで、これまでの関わりを通じて見えてきたこと、自分自身に起きた変化などを議論しました。本会に参加した13名(メンバー紹介欄を参照。敬称略)からの言葉を、今回から3回の予定で紹介します。ご自身のスキルを社会に役立てたいと考えられている方に、自らのスキルを社会に役立てる中で自分自身に起きる良い変化などをお伝えできればと思います。

▼図1 Hack For Japanのスローガン

```
while (Japan.recovering) {
    we.hack();
}
```

Hack For Japan

### 福島での復興支援が実業にも変化を

**佐々木**:福島の近況報告をすると、最近は周辺のエンジニアのみなさんはロボットに注力しています。現在、南相馬市の避難指示解除準備区域近隣の広大な土地に準備された「福島ロボットテストフィールド[注1]」と呼ばれる試験場があり、ドローンなどが飛ばし放題な飛行場や自動運転車の試験、住宅を水に沈めた環境でのロボット実験など、ロボティクスに関連したさまざまな取り組みが始まっています。同じ福島と言っても沿岸部から遠く離れた郡山(こおりやま)から直行バスがつながり、さらに現地では日産の電気自動車のスマートカーシェアサービス「はまモビ[注2]」で今風のMaaS(Mobility as a Service)のような環境も整い、スムーズに沿岸部の福島ロボットテストフィールドへと行き来できるようになりつつありま

注1 https://www.fipo.or.jp/robot/
注2 https://e-sharemobi.com/hamamobi/top.html

## 振り返り会
### Hack For Japanメンバー紹介

今年の振り返り回では、全13名のHack For Japanメンバーが集まりました。本連載のバックナンバーで見覚えのあるメンバーもいるかと思います。それぞれ別々の企業に属しながらも、各々のやり方でHack For Japanの復興支援活動に震災当時から取り組んできました。また、そこからさらに裾野を広げて防災・減災や開発者支援、IT教育などの分野で社会貢献に携わるメンバーもおり、Code for Japanの設立につながっています。

**山崎 富美**
Hack For Japan立ち上げ当時はGoogleに在籍し、東北Tech道場などにも関わる。現在はNianticに在籍。

**佐伯 幸治**
Hack For Japanではコピーライティングを主に担当。普段はフリーランスとしてWebや紙媒体の編集制作・コピーライティングに携わっている。減災インフォなども運営。

**吉岡 弘隆**
オープンソースの先駆者として、ミラクル・リナックス等を経て、楽天の技術理事を務めた後、現在は定年退職をし、大学生として研究に勤しんでいる。

す。沿岸部周辺も再開発が進んできているので、これからこのエリアがおもしろくなっていきそうです。会津のほうはというと「スマートシティAiCT[注3]」という500人規模の人々が働くことのできる官民連携型の施設が、IT企業を誘致するために開所されました。おもに東京からオフィス機能を移すような施設を目指しており、さまざまな企業がこの場所に集まってくる流れができています。

**及川**：佐々木さんは現在、東京と会津の両方で活動されているんですか？　震災当初はもともとAndroidのアプリケーションを主な事業にされていたと思いますが、最近は深(しん)センの工場のようなものも持たれていて、ハードウェアへの取り組みが多いように感じています。

**佐々木**：はい、最近は東京と会津を半々で行ったり来たりの生活です。東京も秋葉原の近隣に引っ越したので電気街へのアクセスも容易です。そのおかげでハードウェアの開発、製造も楽になりました。このハードウェア製造のきっかけになったのは、東日本大震災の直後の放射線量を測るガイガーカウンターを作る取り組みでした。そのおかげでさまざまなハードウェア開発の知見が深まり、最近では自社のハードウェア事業が売上の3割くらいを稼ぐほどになりました。そういう意味でいうと、Hack For Japanでの取り組みが自分自身の仕事にも大きく影響を与えてくれました。今では自動運転車にも興味が出てきて、先ほどの福島ロボットテストフィールドでもいろいろと取り組んでみたいと思っています。ほかには育成目的で学生をシリコンバレーに連れて行き、合宿研修なども行ったりしています。

## 福島原発での視察を通じて

**鎌田**：震災に関連する話でいうと、先日に、正式な手続きを踏んで福島第一原発付近の視察に行ってきました。その直前にも福島第一原発の2号機における燃料デブリ[注4]への接触が行われており、福島第一原発周辺ではさまざまなテクノロジーが投入されています。先ほどの佐々木さんの話にも挙がったようなロボットなどもその最たる例だと思います。線量はかなり落ち着きを見せており、避難指示解除準備区域が広がっています。さまざまな報道がされてはいますが、あの絶望的だった当時の状況から8年たった今、一歩一歩前進している様子がうかがえました。

一方で帰還困難区域も見てきたのですが、そのエリアは2011年3月11日のあの日のままの荒れ果てた姿を留めており、東北の他エリアの今日までの復興を目の当たりにしてきただけに、この視察の中でも一番ショックな光景でした。また、東京電力廃炉

注3　https://www.aizuwakamatsu-investment.jp/3732/

注4　原子炉の事故により核燃料とその周辺のものが溶け落ち、冷え固まったもの。

**関 治之**
Georepublic Japan社CEO。Geo Developerとして位置情報系のサービスを数多く立ち上げてきた。Code for Japanを立ち上げ代表理事も務める。

**佐々木 陽**
福島県会津若松のGClue代表取締役。Android、iOSアプリ、ハードウェアの開発が主な事業。大学生などにプログラミングを教える活動を10年以上行っている。

**三廻部 大**
震災当時はGoogleに勤め海外に出張していたことから、時間差を活かして震災直後のHack For Japanの活動をサポート。現在はArm Treasure Dataに勤務。

**冨樫 俊和**
震災当時はヤフーに勤め、Hack For Japanではリレーションを担当。経産省、MRIと連携し石巻ツアーを企画。現在はソフトバンクにてプロモーションを担当。

**清水 俊之介**
株式会社dott CTO。東日本大震災における復興支援活動の中でHack For Japanと関わり、途中からメンバーとして活躍。元は絵画修復士だったがエンジニアに転身した。

資料館[注5]というものが昨年にオープンして自由に見学できるのですが、気になった点としては東京電力の方々の全面に謝罪の姿勢が表れた応対でした。これから廃炉には30年以上かかると言われています。そうした途方もない時間がかかる中で、将来にわたって謝罪し続ける仕事というのは、想像してみればわかることですが、非常につらい業務になると思います。事故を起こした当事者の姿勢としてはあるべきものだとは思うものの、廃炉に取り組むという面で見ると、彼らの働きにかかっているという側面もあり、原発の問題を抱える日本に住むものとして、外からムチを打つような態度ではなく、電力を使うものとして一緒に問題の解決にあたるにはどうすべきか？という当事者感覚を持つ必要があると感じました。そして、何より震災から8年が経ったということは、東日本大震災以降に生まれた子どもたちが小学生になっているということでもあり、これからの時代に向けてあの日の記憶が風化し、失われていってしまうことが予想されます。そうした状況をあらためてとらえ直すべき時期かもしれません。

## 浪江町のこれまでとこれから

**関**：Code for Japanを運営しはじめてしばらく経ちますが、震災に関して言えば福島第一原発の影響を大きく受けた福島県浪江町（なみえちょう）とのつながりが深く、2012年からいろいろとお手伝いさせてもらっています。震災直後、浪江町から避難が始まっていた時期には、全国に散り散りになった一次避難をされている人たちに向けて、浪江町の状況を正しく伝えるという課題がありました。そうした人たちに浪江町の広報誌を月に1回送っても、なかなか必要な情報が届かなかったり、町民同士の絆が完全に失われていたり、という状況でした。そこで、タブレット端末を配布しそこに情報を届ける形で高い利用率になった「なみえ新聞[注6]」や、お年寄りにも使える写真だけでつながるSNS、ゆるキャラなどの開発にも携わりました。

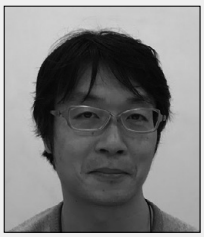
そうした状況から8年が経って帰還も始まっており、だいぶフェーズが変わってきました。以前のようにタブレット端末で遠く離れた浪江町の住人同士をつなぐという観点から、復興しつつある現状を浪江町の住民にも、また、浪江町以外の人たちにも伝わるよう広報誌のリデザインや情報発信サイト「なみえまるみえ[注7]」の開発などを行っています。

一方で浪江町での仕事が少ない状況であったり、避難して8年も経つと子供がいるような家庭では、生活の基盤も避難先の町に完全に移ってしまってい

注5　http://www.tepco.co.jp/fukushima_hq/decommissioning_ac
注6　https://www.town.namie.fukushima.jp/soshiki/2/201405tablet.html
注7　https://www.730.media/

**小泉 勝志郎**
震災直後は南相馬でアプリ開発者育成や「うらと海の子再生プロジェクト」にてIT関連を担当。現在はシニアの開発者育成も手がける。株式会社テセラクト代表取締役。

**高橋 憲一**
震災後に立ち上がった東北Tech道場で当初から現在に至るまで講師を務める。現在は株式会社カブクに所属。



**石野 正剛**
震災直後に福島第一原発から放出される放射性物質と風向きを地図上に可視化するスマホアプリ「風@福島原発」を開発した。

**及川 卓也**
Hack For Japanの立ち上げ後も「IT x 災害」の開催や「一般社団法人情報レスキュー隊(IT DART)」を立ち上げる。現在はTably株式会社の代表取締役。

**鎌田 篤慎**
震災当時、APIを扱う仕事に就いていたことから、国の復興支援APIへの提言や福島のITコミュニティ「エフスタ!!」のサポートなどを行う。ヤフー株式会社に所属。

るなど、なかなか厳しい状況があります。そうした状況をふまえて、我々のサポートの方向性も新しい人を呼び込むということも含めた考え方に変わりつつあります。避難先から帰還したあとの生活を考えるというところから、新しい町づくりといった方向への転換が重要だと思います。そうした中でも若者などの動きが出てきていて、コワーキングスペースの運営やさまざまなイベントが各所で立ち上がり始めています。こうした新しくおもしろい動きを支援していきたいと考えています。

**佐々木**：私の会社にも、帰還困難区域の大熊町から会津に避難してきた子が入社してきました。もともと帰還困難区域に住んでいて、小学生のころに避難してきたというのもあるかと思いますが、会津に根を下ろすつもりで開発に励んでおり、確かにそうした若者が増えてきているように感じています。帰れるところと帰れないところでも、状況は大きく変わってきそうです。

## データを残すことで未来につなぐ

**清水**：近況の報告をすると、2015年に会津にいた友人と新しい会社を東京で立ち上げてから、私は住居を東京から福島県の郡山に移しました。他拠点での事業のほうも順調で、社員数が増えてきて大きくなりつつあるので新しいことを始めようとしています。私が郡山のシェアオフィスで働いているので、そこに集まるデザイン会社などさまざまな人たちとの間で、コードやデザインの力で社会貢献していくことを考えています。そこで今話題になっているのが会津漆器で、会津漆器の職人が減り、後世に会津漆器を残せなくなっていく危機的な状況に向けて、失われていく技術的なところ、データ的なところをいかに残していくかということを議論しています。私自身、もともとがエンジニアではなく絵画修復士でもあったことから文化財保存のバックグラウンドを持っているので、この数年で培ったエンジニアリングのスキルを、そうしたところに還元できないかと考えているところです。

**山崎**：データといえば、東日本大震災を風化させないために、発災当時のさまざまなデータを使ってそのときの状況を可視化しようという取り組みを2012年にやりました。喉元過ぎれば熱さを忘れるということから、震災の観点から見てもデータとして残す、活かすという取り組みは、何が起きていたか？ということを明らかにし、次なる震災に備えるためにも大切だと思います。

**清水**：ただ、今回の振り返り会で鎌田さんや関さんから、今なお震災の影が残る福島沿岸部の話を聞いてショックを受けました。同じ福島でも私が住み移ってきた郡山は、今では震災の爪痕(つめあと)はほとんどありません。まだまだ考えるべきことが多いように感じました(次号につづく)。SD